

## 橋本直哉さんのライフストーリー

～よそから来たからこそわかる秩父別の良さ～

早川・ワンワン

<新卒で秩父別にやってきた青年>

橋本さんと会う前は、秩父別町のようなあまり知られていない田舎で働いている若者はどんな人だろうと気になっていました。道の駅に入ると、優しくて気さくなお兄さんがいました。その方が今回話を伺った橋本さんです。橋本さんはお客さんがお店に入るたびに「いらっしゃいませー」と元気に挨拶していました。橋本さんはとてもリラックスしていて、優しいような雰囲気をしていたので、私たちも気楽な思いでインタビューすることができました。話を聞いていくと、橋本さんはマイペースな人とわかりました。

橋本さんは岡山県出身で、24歳の若者です。倉敷の芸術科学大学を卒業して、去年の5月に地域おこし協力隊という制度で秩父別町に来ました。地域おこし協力隊とは国の制度であり、人が都会に集中するのを防ぐため、若者が都会から田舎へ移り住み、三年間の協力活動を補助する制度です。政府は移り住むためのお金を補助して、固定給で給料を支払っています。橋本さんが協力隊として来てからおよそ1年半が過ぎ、役場の職員のように役場で仕事したりする場合がありますが、主に町や町民の助けになることをしています。橋本さんは協力隊になってから銃の免許を取得したので、農家に動物が出たときなども駆除の手伝いができます。今年の4月からは主に道の駅の駅長を担当しています。ここでは店員としての仕事、シフト管理、商品の納品、月末の棚卸しなどの仕事をしています。橋本さんは他の市町村の道の駅を参考にしたり、品の並べ方など色々調べたりしました。そして、窓に貼ってあるものを減らしたり、店内を明るくしたり、お菓子も増やすなどお店のために色々な工夫をしました。最初はうまく行くかどうかを心配でしたが、町の人に道の駅を褒めてもらって、達成感を得ました。マイペースな生活が好きな橋本さんにとっては、今の仕事は比較的自由に行えるので、毎日楽しんでいきます。



道の駅店内の様子。撮影日 2019 年 12 月 7 日

<岡山から秩父別に来た意外な理由とは…>

大学までずっと岡山県に住んでいた橋本さんは、なぜ北海道に来たのでしょうか。それは意外な理由でした。橋本さんは高校生の時にお姉さんの引越しの手伝いのために北海道に来ました。そこで北海道の海鮮を初めて食べ、非常においしくて感激しました。もともとは刺身が苦手だったのに、それをきっかけに海鮮が食べられるようになったそうです。橋本さんは北海道のおいしい食べ物に魅力を感じたため、北海道に憧れ、北海道での就職を目指しました。その後札幌で仕事を探していた際に、秩父別町の役場の方にお会いする機会があり、その方に勧められたのがきっかけで秩父別町に地域おこし協力隊として来ました。秩父別町に着いた際、たくさんの田んぼや畑を見て、どこか懐かしさを感じました。今は多くが住宅地になってしまったけれど、昔橋本さんが住んでいた地域にも田んぼがあって、小さい頃は田んぼでたくさん遊んでいました。この田んぼへの懐かしさもまた橋本さんが秩父別町に惹きつけられた要因だと思います。橋本さんは食べ物がおいしく、田んぼに囲まれた、そんな秩父別町を気に入ったのでしょう。

<初めて尽くしの秩父別！>

橋本さんは元々岡山県に住んでいたため、秩父別での生活にはたくさんの驚きがありました。例えば、雪や電車の量です。岡山では年に3回ほどしか降らない雪が秩父別では春

になっても残っていてとても驚いたそうです。また、1日に数本しか来ない電車には秩父別に来てすぐの頃は苦勞したそうです。ただ、秩父別での生活は新しい発見の連続で面白く、最初の頃は景色などの写真が撮りたくて仕方がなかったそうです。見晴らしがよく遠くの山も綺麗に見え、空も広い。秩父別町での景色は素晴らしいものです。そんな秩父別町に対してさらに橋本さんは続けました。「秩父別町における一番素晴らしいところは人の温かさだと思う。」と。雪が降れば当たり前のように歩道まで除雪したり、当たり前のように他の人のために行動できる、そんな「人の温かさ」が秩父別町の財産だと言っていました。周りの地域おこし協力隊仲間が苦勞している中、橋本さんは秩父別の方たちの温かさのおかげでとても充実しているそうです。

<いつまで秩父別にいるの？>

橋本さんの入っている地域おこし協力隊という活動は三年間という期間のあるものです。その三年間を終えた後橋本さんはどうするつもりなのでしょうか。秩父別町に残るのか、はたまた、岡山に戻ってしまうのか。橋本さんに何うとこのように言いました。「その後も特別な理由がない限り秩父別に住み続けたい。」なぜそのように思っているのか何うと橋本さんの秩父別町に対する特別な思いが見えました。橋本さんにとって秩父別町は「救い」であるそうです。北海道にきて何をしていたかかわからなかった自分を不安から救い出してくれた存在が秩父別町だったそうです。みんな気さくに話しかけてくれ、すぐに自分を受け入れてくれたことで不安から解放されました。北海道胆振東部地震の際にも、一人で電気もなく不安で仕方がなかったとき、町民の方がカセットコンロを貸してくれ、ご飯を分けてくれたそうです。地震の後で自分のことだけでも精一杯であったはずなのに、よそから来た自分に手を差し伸べてくれる。そんな秩父別の温かさに幾度となく救われたそうです。そんな秩父別町に何か恩返しをしたい、何かしらの貢献をしたい。橋本さんはそのような思いで秩父別に残りたいと考えています。橋本さんはその一つの形として起業を考えています。元々パソコンが好きなこともあり、3Dプリンターなどを用いて秩父別関連の小物を作り、それを道の駅などで売るというイメージを持っています。そうすればもし地元に戻らなければならなくなっても、小物を送り続ければ秩父別町に関わり続けられます。今はまだそれに関する勉強はほとんどできていないそうですが、どんな形であっても秩父別に関わり続けたいと言っていました。その言葉には迷いは一切感じられず、秩父別町に対する特別な思いが感じられました。橋本さんの「救い」となった秩父別町。橋本さんは今後も秩父別町のために働き続けるでしょう。



道の駅前での写真。

橋本さん（真ん中）早川（左）ワンワン（右）撮影日 2019年12月7日